The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	南宋修内司官窯の青磁について : 杭州老虎洞窯址出土品を中心に
Author(s)	孟, 白麗
Citation	デザイン理論. 2004, 45, p. 33-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52969
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

南宋修内司官窯の青磁について
── 杭州老虎洞窯址出土品を中心に ──

孟　白麗
大阪大学大学院博士後期課程

キーワード
青磁，官窯，修内司官窯，老虎洞窯址，汝官窯
Celadon，Official Kiln，Xiuneisi Official Kiln，
Laohudong Kiln-site，Ru Official Kiln

1．はじめに
2．杭州老虎洞窯址の発掘
3．宋代における官窯の系譜
4．北宋汝官窯から南宋修内司官窯への影響
　4－1南宋修内司官窯における北宋汝官窯の影響と見られる特徴
　4－2南宋修内司官窯における北宋汝官窯から継承された形
5．修内司官窯独自の様式と特色
6．終わりに

1．はじめに

中国の陶磁器研究では，近年，考古学が大きな役割を果たしている。北宋時代（960－1127年），いわゆる北宋王朝が関わった汝官窯，また南宋王朝（1127－1279年）が建てた修内司官窯，同じく郊壇下官窯，その三つの窯址が1985年から，この20年ほどの間に，相次いで発掘された。

北宋および南宋の，いわゆる宋官窯については，今日まで不明な点が多かった。一般に，民窯が庶民のために日常で用いられる陶磁器をつくったのに対し，官窯は主として宮廷が必要とするものを焼いた。伝世品は多くないが，宋官窯の遺品とされるものも，窯そのものが発掘されないかぎり，その伝世が正しいかどうかも検証できないわけである。したがって，宋官窯の製品がどのような目的をもち，どのように焼かれ，どのような特色を備えているかなど，もっとも根本的な問題さえ今までは曖昧なままにされてきた。このような曖昧な点が，考古学の発掘調査が進むにつれ，明確になってきたのである。

本論文は，従来から参照されてきた古文献と伝世品，およびこれまでの研究に加えて，宋官窯についての考古学上の新しい発見を基礎に据えている。筆者は，2004年4月に杭州老虎洞官窯遺跡の発掘担当責任者である杜正賢氏（杭州文物考古所）の好意により，発掘された南宋時期破片及び修復された出土品の実物資料を直接に見る機会を得た。これらに関する経験と最

新の研究をふまえた上で，本論文をまとめて行きたい。

修内司官窯の遺跡，すなわち杭州老虎洞にある窯址については，2002年10月に，発掘報告書が公にされている。この発掘報告書によって，出土破片，窯の構造，窯道具，さらには焼造技法，磁器の造形と釉薬の関係，また装飾の仕方つまり工芸技法までもが，ある程度明らかになった。

こうしたものを分析した上で，本発表では最終的に，南宋の修内司官窯の生産品が，修内司官窯のあった江南周辺で製作された陶磁器よりも，直接的には北宋の汝官窯から強い影響を受けているということを示したい。その上で，修内司官窯の独自の様式や技法の発展を見極めることによって，汝官窯との違いも考察する。そうすることによって南宋官窯の本当の性格と特色が明らかになるだろう。さらに中国陶磁工芸史における修内司官窯の位置付けを試みたい。

南宋の葉眞は『坦斎筆衡』(注1)で，宋官窯の窯の名前と，窯のある場所，その窯で実際に磁器が生産された時期，また宋官窯でつくられた青磁の特徴を，民窯の作品と比較して述べている。その中で特に指摘した大事な記述には，「襲故京（北宋の汴京）遺製，置窯于修内司，造青器，名内窯。……後郊壇下別立新窯……」とある。つまり，修内司に設置された「内窯」と名づく窯は，後に郊壇下に築かれた「新窯」と称された窯よりは時期的に早いことが示された。この同時代における信憑性の高い記述から，宋官窯には少なくとも，汝窯，北宋官窯，そして南宋の修内司官窯と，おなじく南宋の郊壇下官窯のあることが今に知られることとなった。

明の高濂『遵生八賤』(注2)に「所謂官者，焼於宋修内司中，為官家造也。」という記述がみえる。これはつまり官窯として修内司という役所に所属する官営の窯であることをはっきり示した記述である。

また明の曹昭『格古要論』(注3)にも「宋修内司焼者，土脉細潤，色帯粉紅，濃淡不一，有蟹爪紋，紫口鉄足，色好者与汝窯相類。」という修内司官窯の胎質，釉色，貫入，及び紫口鉄足の特色が示されている。これは更に汝窯との類似関係にも言及した重要な記述である。

しかし，宋代の文献には『坦斎筆衡』以外に詳細な記述が少ないため，文献にもとづいて宋官窯の実態を明らかにすることは困難なことであった。にもかかわらず，中国内外の研究者によって盛んに議論が積みかさねられた(注4)。こうしたことからも，中国陶磁史のなかで宋官窯がいかに重要であるか，推察できようというものである。ただし，発掘調査を経た現在，これまでの研究は大幅に見直されなければならない。

2．杭州老虎洞窯址の発掘

杭州市文物考古所は，1996年から2001年まで，杭州の鳳凰山の万松嶺，「老虎洞」と呼ばれるところにある窯址を発掘した。現時点での，その最終報告書が『文物』2002年10月号に記

載された[注5]。更に杜正賢主編『杭州老虎洞窯址瓷器精選』も出版された[注6]。それによれば，発掘品はほとんどが青磁で１万点あまり，窯址は四つの時期が区分されるという。

第一期は北宋期で，生活遺跡であり，窯の生産活動と直接の関係はない。

第二期は南宋初期で，２ケ所の埋め穴から出土した破片は，二種類に分類される。一ケ所に日常生活に用いられる器として碗，盤，鉢，盞托，紙槌瓶，梅瓶，大鵝頸瓶（長頸瓶），梅瓶蓋，碗蓋，供碗などがあり，これらには「厚胎厚釉」のものが多かった。もう一ケ所には古玉器，古青銅器に倣ってつくられた礼器類があり，その中でも特に樽式香炉，尊，觚，鼎式香炉，鬲式香炉，琮形瓶などが多くあった。出土品礼器類の多くは，南宋の官窯の青磁に特有な特徴をそなえていた。すなわち「薄胎厚釉」という特徴である。器壁が薄く，釉を何度も重ねて施し，釉の部分が胎より厚いものもある。

また「紫口鉄足」という特徴もある。胎土は，陶器質であるため，鉄分を多く含み，灰褐色と褐黒色を呈している。そのために，器の口縁の釉が，焼かれるときに流れて薄くなり，胎の色が透き通るように見え，これを「紫口」という。器高台の畳付部分の胎が黒色を呈している。これを「鉄足」という。

さらに「裏足支焼」という独特な焼成技法による特徴も備えている。これは実は，北宋の汝官窯でつくられた天青釉磁の特徴でもある。すなわち器の内外すべてに釉を施す（総釉）が，焼くときに高台を下から支える窯道具の突起の跡が，小さな目跡になって残される。報告書は，第二期の出土品を修内司官窯の生産品であるとし，南宋前期としている。

第三期は，窯道具が塾焼具に変わり，碗，盤類における高台の特徴が「裏足刮釉」となる。これは器の全体を施釉してから，高台の畳付部分の釉を削り取って，「塾圏」（輪形の窯道具）或いは「塾餅」（円形の餅形の窯道具）の上で焼成する技法である。またこの結果，高台は，小さく低くなり，直立することとなる。焼造時期は，郊壇下官窯の初期のころと同じ時期だろうとしか推定されていない。

第四期は元王朝の時代で，碗，盤，洗，瓶，香炉，鳥餌壷など装飾器が多い。窯道具にはモンゴル文字のパスパ文字が記されており，そこから時代が元代と考えられている。

第二期，第三期の出土品は，それぞれの発掘場所で，まとまって集中的に埋められている。一般に流布しないように隠されたと考えられる【図１】。これは民窯ではありえないことで，官窯の特色が如実にあらわれているといえよう。

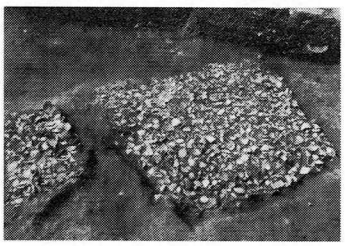

図１　老虎洞窯磁器破片の埋め穴

発掘された約一万点の青磁のうち，復元可能な青磁は800点，器の形は20種類に及ぶ。出土品は今後も，南宋

官窯の実態を理解するために欠かせない重要資料であろう。

第二期の破片は，現物を観察した限り，粉青釉の出土破片が多いが，米色青磁もある。釉層に氷裂紋のような貫入が，また器全体に細かな魚の鱗状の貫入が生じている。

3．宋代における官窯の系譜

宋代の官窯の関係を見る前に，まずそれ以前からの官窯の系譜を確認しておく必要があるだろう。

中国最初の官窯は，10世紀，五代十国の時代，呉越国（907－978）にさかのぼると言われる。俗にいう唐•五代の秘色青磁が浙江省北部沿岸地域の越州窯で作られた(注7)。

続いて五代末期の後周に，「柴窯」という官窯がたてられたという伝説がある。いわゆる「雨過天青」とよばれる色の青磁を焼いたという(注8)。伝説ではなく，実際の天青について初めて言及したのは宋代周密の『乾淳起居注』であり，それによれば，南宋の宮廷は汝窯の器を使用し，これを「天青汝窯」と称したとされる(注9)。

1984年に，五代耀州窯のひとつ陝西省銅川市の黄堡窯で，「官」という銘の入った青磁標本が発掘され，伝説の柴窯はにわかに現実味を帯びてきた(注10)。柴窯は，黄堡窯ではないにしても，広い意味での耀州窯に含まれるだろうという推測もある(注11)。そして，東窯といわれるギメ美術館の「青磁牡丹唐草紋水注」は，明らかに北宋の耀州窯に特徴的な様式の器であることが確認されている。これらのことからも，耀州窯が，五代から北宋時代にかけて，北方窯系が形成される過程で，とくに青磁の焼成技法において中心的な役割を果たしたことは，間違いあるまい。長谷部楽爾氏は「東窯といわれるものに施された淡青色釉は，汝窯の淡青色釉と共通点があるばかりでなく，南宋官窯の淡青色釉とも関連があるように思われる。」(注12) と，淡青色釉に着目して，指摘している。

宋代は，中国陶磁史の中でも磁器の使用がめざましく普及した時代である。その理由には，唐代の中期から宋代に至って磁器焼成技術が進歩したことで，隋唐時代の「南は青磁，北は白磁」という地域性を超えて，全国的に磁器の生産が普及したことが考えられる。この事態を，愛宕松男氏は，「一は主体的条件ともいうべき瓷器焼成技術の進歩であり，二は瓷器を取り巻く客観的状勢，つまり中唐期に特異な政治・社会現象の発生である。」(注13) としている。技術が急速に進歩するにつれ，磁器は日常の要求に幅広くこたえることができるようになった。胎が薄くなり，様々な釉薬が発明されて，実用性が増すとともに機能性の高い造形と豊かな彩りを楽しむことができるようにもなった。宋代にいたって，庶民が日々の生活で用いた瓦器も，貴族が宮廷で使用した玉，漆，金銀銅器も，多くは陶磁器がそれに取って代わったのである。また庶民から宮廷御用の製品まで，様々な需要に応じる生産のメカニズムが成立し，磁器の生産

は，宋代を代表する手工業となった。

前述の愛宕氏があげた「瓷器を取り巻く客観的状勢の変化」とは，宋代の官窯の成立にとっても重要な背景といえる。つまり中晩唐期には，「銅の使用禁止令」が出たほど，銅不足が深刻な事態を迎えていた。そこで新興の富裕階級は，銅器に代えて，大いに陶磁器を求めることになった。日常生活で用いる器だけではなく，居室空間を飾るために，この階級は自らの趣味にかなった磁器を求めた。喫茶の習慣が盛んになったことも見逃せない。

図2　伝劉松年「博古図」南宋　台北故宮博物院所

宋代は中国文化におけるルネサンスともいうべき時代である。中国文化の原点である儒教思想の復興が目指され，古代の青銅器を尊重，さらには崇拝するまでになった。殷周及び漢代を対象とする考古学，金石学研究が，宋代になると盛んに行われた。

台北の故宮博物院が所蔵する伝劉松年（南宋）が描いた「博古図」【図2】は，この時代の文化傾向を端的にあらわすものである。古代の青銅器，鼎，簋，壷などが描かれ，絵の中の人々は熱心にそれを鑑賞して飽きることがないかのようである。

実際，北宋の徽宗皇帝は北宋時代の『考古図』などにならった「新成礼器・青銅器」(注14) を数多く製作した。例えば現在北京故宮博物院に所蔵されている宣和三年（1115年）の「宣和山尊」(注15) があげられる。このような文化的な背景のもとで，汝官窯においても，これまでに陶磁器として現れなかった古青銅器様式の青磁を作るようになった。例えば汝官窯の代表作のひとつとされている，北京故宮博物院の「青磁三足香炉」【図3】は，漢代の青銅器樽を手本にしたものである。

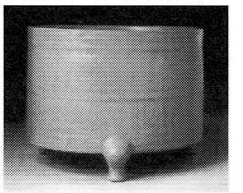

図3　青磁三足香炉　汝窯　北宋　高さ12.9cm　口径18cm　北京故宮博物院

風流才子徽宗皇帝は，優れた芸術の鑑賞力により，汝官窯のような格調の高い様式の青磁を求めたこともあるだろう。皇帝の熱意により，美の極致に達したと言われる汝官窯の「天青釉磁」が誕生したと推測しても，無理なことはない。これは皇帝の御用品にふさわしい，官窯様式の洗練された青磁である。北宋宮廷の美意識によって追究された至高の美として，汝官窯の天青釉の青磁と，複製の三礼時代からの青銅器及び優れた書画なども貴重な文化財産として残されている。皇帝の風流の大きな代償として，北宋は金により滅ぼされた。

北宋が金に滅ぼされたことで徽宗の収集した芸術の名品と宮廷の倉庫も略奪され尽くした。その後，皇族の一族が北方に連行されたが，唯一徽宗の九男・高宗が難を逃れて，江南の臨安（杭州）を都とし，南宋を建てた。

しかし，153年の歴史を有するとはいえ，戦いに疲弊した南宋はその初期から国力が衰えており，もはや青銅器をつくる余裕がなかった。したがって，本来用いられるべき玉器，青銅器の代わりに，陶磁の祭器(注16)を用いて儀礼をとりおこなった。また宮廷内を装飾したりするための洗練された様式の陶磁器が必要とされたということもある。

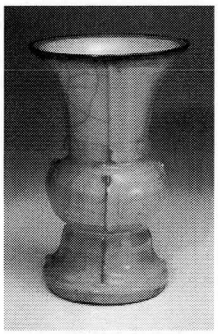

図4　粉青尊　修内司官窯
南宋　高さ25.9cm
台北故宮博物院

修内司官窯の伝世品に，古青銅器の尊を手本にした青磁尊瓶がある【図4】。これは先述の宣和山尊と相似したデザインである。これら【図3】青磁三足香炉と【図4】粉青尊は，汝官窯と修内司官窯の共通の様式である。

図5　青磁破片「大吉」の印花がある。汝民窯出土　宋時代

こうした古代の玉器，青銅器の様式をとりいれた宋官窯の様式には，耀州窯，磁州窯などの同時代の民窯の様式と，歴然とした違いがある。同じ汝窯であっても，民窯から出土した壷や碗と比べれば，その違いは明らかである。民窯の出土品は，当時人気があった寓意的な装飾文様と飾りで華麗におおわれ，容器としての実用性も備えている【図5】。

以上，官窯系譜の流れを見ると，耀州窯が技法開発の中心であったとしても，汝窯に官窯が定められて以降は，この官窯が果たした役割を無視することはできないと思われる。官窯では，朝貢品として宮廷のための需要と供給に基づいた生産をなされていたと共に，質の向上を図ることができた。そこではあらゆる技法が試されたに違いない。そして，それが南宋の修内司官窯に引き継がれていく。

4．北宋汝官窯から南宋修内司官窯への影響

北宋の汝官窯と南宋修内司官窯の特徴を具体的に比較検討していくにあたって，まず，汝官窯について簡単にふれておく。

汝窯には，民間の窯と，宮廷御用器を製造した官窯があり，後者は汝官窯とよばれる。汝官窯は，1986年に発見され，2000年まで，宝豊清涼寺汝窯址で発掘された(注17)。この発掘をもとに，汝窯の最盛期は，「宋の元佑元年（1086年）から宣和末年（1125年）に至る40年間，すなわち哲宗，徽宗の時期である」(注18)と推測されている。

汝官窯の焼造技法の特徴には，「裏足支焼」がある。また，汝官窯磁器の特色は，「天青釉」，「不規則な貫入」，「香灰胎，即ちやや褐色の入る灰色」，「小さな目跡」と，盤，鉢，洗類の「撥形高台」などである。

一方，北宋官窯について『坦斎筆衡』には，北宋政和年間に汴京官窯，つまり北宋官窯が存在するとしるされている。更に，「襲故京（北宋の汴京）遺製」と記述されている。したがって，この記述を信じるならば北宋官窯に継いで修内司官窯が置かれ，こうして南宋官窯がはじめられたということになろう。

現在まで北宋官窯については，その実在すら確認されてこなかったが，先駆的な調査・研究は存在する(注19)。さらに，2004年5月20日に，汝州市張公巷の窯址の発掘について，専門家論証会で，その張公巷窯址が北宋官窯だと推定された(注20)。さらに発掘調査が進み，この推定が確認できれば，『坦斎筆衡』の記述が立証されることになるかもしれない。汝官窯と修内司官窯とのあいだに北宋官窯を挟んで考察しなければならない可能性があるということになる。だが，それについては発掘の成果を待って，改めて考える予定である。本論文では，さしあたって，汝官窯と修内司官窯の関係に考察を絞りたい。

2001年に行われた杭州老虎洞窯址考古発見専門家論証会では，宝豊清涼寺汝窯址の発掘を担当した孫新民氏が「老虎洞窯址の生産品と汝官窯の生産品には，明白な影響関係がある」(注21)と指摘している。では，汝官窯が修内司官窯におよぼした影響とはどのようなものであろうか。実際の作品を通じて検討する。

まず，窯および焼成技法，造形形式，装飾技法の類似点として，窯の構造，裏足支焼，撥形の高台，透かし彫り，弦紋，の六項目をあげ，次に，二つの官窯でつくられた青磁のなかで類似した造形として，樽式香炉，鵝頸瓶（長頸瓶），紙槌瓶，盞托，洗の五つの形を代表的な例としてあげていく。

とりあげる作例は，北宋汝官窯からの出土品に加え，汝官窯及び修内司官窯と確認された伝世品，そして，杭州老虎洞窯址からの出土品，すなわち修内司官窯の生産品である。

4－1　南宋修内司官窯における北宋汝官窯の影響と見られる特徴

〈窯の構造〉

老虎洞窯址の発掘では，龍窯（斜面に築いた細長い単室窯）が三基と饅頭窯（平地に築いた丸い単室窯，また甲窯と呼ぶ）が四基及び作坊（アトリエ），十二個轆轤の基部などが発見された。

老虎洞窯址の発掘報告書には，饅頭窯が宝豊清涼寺汝窯窯址の饅頭窯と類似していること，また窯の周辺で素焼破片が発見されたことから，素焼窯だと推測されることが記されている【図6】。

図6　饅頭窯　老虎洞窯

饅頭窯は，宋元時代では，耀州窯系の窯として，汝窯の窯址をはじめ，多くの北方窯系にみられる窯である。南方を代表する越州窯

と龍泉窯には，逆に龍窯の方が多い。老虎洞窯址は，三基の龍窯以外に清涼寺汝窯窯址と類似する饅頭窯四基が発掘され，南方地方の窯構造と異なっている窯も存在していたことがわかる。ここから老虎洞窯址が北方窯系を継承された特徴があると見られる。発掘された饅頭窯の窯構造は，汝官窯のそれと類似している(注22)。

〈裏足支焼〉

「裏足支焼」とは，総釉ともいわれ，高台を含む器全体に釉をかけるために釘で支えて焼く焼成技法である。そのため，高台内には胡麻のような目跡が三個ないし五個残される。つまり明高濂の『遵生八賤』の「底有芝麻細小錚針」の記述にあたるものである。この技法は，北宋汝官窯に特徴的な焼成技法である。

老虎洞窯址からの出土破片は，「裏足支焼」の特色がある。碗，盤，香炉，器の蓋，洗，鳥食罐などに目跡が残されている。

「裏足支焼」という技法は，すでに唐・五代越州窯(注23)，耀州窯で試行錯誤されていた。耀州窯址から出土した青磁破片には，高台内まで全面に施釉され，高台の底には三つの目跡が残されている例がある【図7】。

「裏足支焼」は，汝官窯に特徴的な焼造技法とみなされる。汝官窯の代表的な作品である上海博物館所蔵の天青釉盤，台北故宮博物院の天青釉紙槌瓶と天青釉蓮花式碗，デイヴィッド・コレクションの天青釉鉢，大阪東洋陶磁美術館所蔵の水仙盆には，総釉の施釉法で釉が器全体にかけられており，淡青色の天青釉に細かな貫入があらわれて，高台内に胡麻のような小さな目跡が三つから六つ残されている【図8】。

一方，老虎洞窯址から第二期の破片と修復された器にも，「裏足支焼」の特徴がある。三つから七つの小さな目跡が，香炉，碗，盤，器の蓋，洗，鳥食罐などの高台内と蓋の裏側および香炉の底裏に残されている。例えば，老虎洞出土の粉青釉盤は，高さ4.8cm，口径18cm，高台内に目跡が五つ残されている【図9】。

この施釉法による「裏足支焼」の焼成技法は，唐・

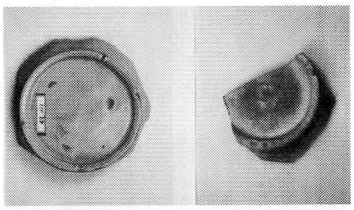

図7　青磁碗片　五代　黄堡鎮耀州窯出土

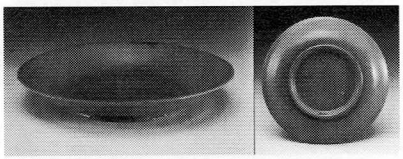

図8　青磁盤（天青釉）汝窯　北宋　口径17.2cm
上海博物館

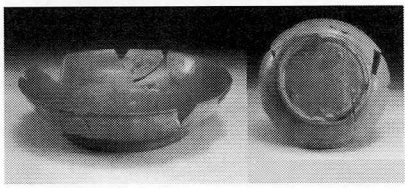

図9　青磁釉盤　南宋　口径18.4cm　老虎洞窯出土

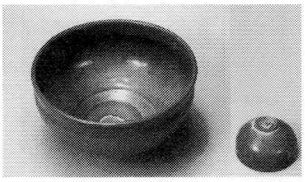

図10　民窯の青磁劃花波涛文鉢　耀州窯
金　口径15.6cm

五代に越州窯・耀州窯で試み，北宋時代に汝官窯で高度な技術に発展し，南宋時代に修内司官窯が受け継いだのである。これは，官窯系譜の継承とみることができるだろう。これに対して一般民窯では，重ね焼きの焼成技法を使用したため，内面の釉を蛇目形に剥いだ跡があり，また高台は素地のままで施釉しないものが多い【図10】。汝官窯をはじめ，南宋官窯作品が卓越した美しさを誇るためには，無釉の部分を最少限にした「裏足支焼」の焼成技法は，欠かせないものであっただろう。

〈撥形の高台〉

撥形の高台とは，撥に似た外開きのかたちの高台を指す。この技法は，唐時代の金銀銅器にすでにあらわれ，越州窯の茶碗にも撥形の高台があった。撥形の高台は唐時代の器類の一形式と見られるのである。北宋時代でも，汝官窯の碗，盤，洗類，瓶，盞托などにおける撥形の高台が見られる。

デイヴィッド財団所蔵の北宋汝官窯の「天青釉鉢」には【図11】，やや裾広がりの撥形高台がみられ，口縁の端反りもみられる。つまり，高台が外に向かって開いているのに対し，口縁もまた外側にかすかに反っている。上下に対称的に広がったこのような形は，宋代の撥形高台の器の特徴になっている。撥形の高台は，器全体に安定感を与えるとともに，高台が下向きに開くのに対して口縁は端反りし，対称的な曲線をなす形を生み出している。

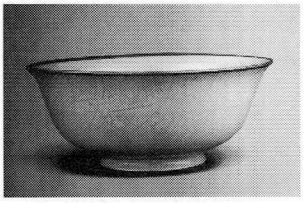

図11　青磁鉢　汝官窯　北宋　口径17cm
ディビィッド財団

老虎洞第2，3期の出土破片には，この撥形高台をつかった碗，盤，花盆，鵝頸瓶，盞托などのさまざまな種類がある。

一例をあげると，鵝頸瓶（長頸瓶）【図12】は，高さ35cmと大型で，実際に手にとると非常に重い。大型器の場合は，高台が本体と別々につくられた痕跡もみられる。器の大きさにあわせるように，高台も，大きく，高くつくられている。さらに，口縁は外に反っている。高台が外に向かって開いているのに対し，口縁もまた外に向かってはっきりと広がっている。上下に対称的な広がりは，器全体の造形に調和を与えている。このような造形は，南宋官窯におけ

図12　青磁大鵝頸瓶　南宋
高35.3cm　老虎洞窯出土

る器の撥形高台の特徴でもある。

以上に述べた二つの特徴，「裏足支焼」と「撥形の高台」は，青磁における官窯の焼成技法と造形形式の特色となった。汝官窯をはじめ，南宋官窯の器には高度な技術で各部分の細工の美しさを追究しながらも，器全体に美的調和と統一を与えている。その部分（例えば器の高台や口縁）には，高台が最も特徴的である。これに対して一般民窯では，重ね焼きの焼成技法を使用するため，また高台が施釉しないため，部分の美が欠けていると見られる。

〈透かし彫り〉

透かし彫りとは，器壁を模様に合わせて一部分くりぬく技法である。透かし彫り技法は，新石器時代の陶器にすでにあらわれている。汝官窯と修内司官窯の伝世品には，透かし彫りの装飾技法で造られた完成品は恐らくないであろう。汝官窯と修内司官窯の発掘破片の中には，小さな破片と透かし彫り瓶，香炉が発見された。

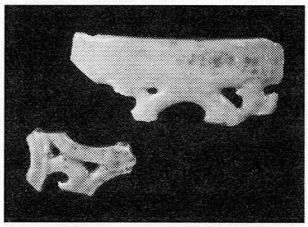

図13　天青釉透かし彫り破片　汝窯　北宋

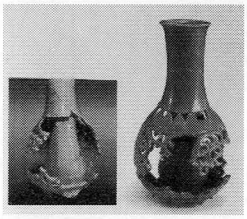

図14　青磁透かし彫り套瓶　南宋
高21.2cm　老虎洞窯出土

汝官窯址の出土品には，天青釉の小さな透かし彫りの破片が二枚ある【図13】。極めて繊細に造られているが，小さな破片だけで器全体の形はわからない。しかし，この技法が汝官窯で使用されていたことがわかる。

老虎洞の発掘破片において，透かし彫りのある器として，瓶と香炉の二種類が出土した。透かし彫り瓶【図版14】は，二重器壁をもつ瓶であり，外側が透かし彫りと刻花の文様で上下三段に分けられている。一段目の肩に蓮弁文が刻花され，中央の広い段に透かし彫りの唐草文，下の段には蓮弁文がある。極めて繊細な技法で構成されたこの手の作品は，官窯の様式を認識するための新しい資料である。

こうした高度な透かし彫りの技法は，汝官窯でも試みられたに違いない。これが更に修内司官窯に継承され，発展したと考えられる。

〈弦　紋〉

弦紋は，凸帯とも言われるが，器の周囲を水平方向にめぐる，弦線のように細く盛り上がった線の文様である。

宋官窯の器における青磁の単色釉への志向には，造形や釉色の美を見極める意欲がある。過剰に装飾的な文様と無駄な部分を省き，簡潔な形と意匠を追究するという宋官窯の性格が表れ

ている。弦紋は，その中で使用されたわずかな装飾技法のひとつである。

汝官窯の「天青釉三足香炉」【図３】には，口縁の下部と裾の上部に浅い弦紋が二つずつ，真中に三つめぐらされている。これは汝官窯に典型的な簡潔な形をしている。

南宋官窯の伝世品と老虎洞窯址からの出土品に，弦紋の装飾がある。具体的には，弦紋瓶，管耳瓶，簋式香炉，壷，花盆，鼎式香炉などの作品に，弦紋の装飾を飾り付けられている。

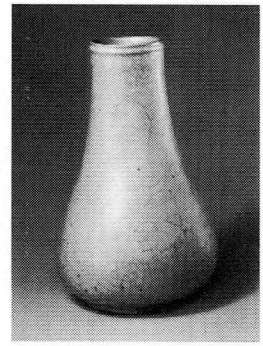

図15　青磁官窯大瓶　官窯　南宋
高34.5cm　北京故宮博物院

北京故宮博物院所蔵の「官窯大瓶」【図15】は，南宋官窯の伝世品である。弦紋が一つあるが，それ以外には装飾技法が一切使われていない。簡潔な形の大作瓶に粉青釉に不規則な模様であらわした貫入だけである。優れた造形意欲に相俟って，かすかな装飾であるこの弦紋は，官窯の性格を象徴する独特の装飾技法だといえるであろう。

４－２　南宋修内司官窯における北宋汝官窯から継承された器形

次に以下で，現在までの老虎洞窯址発掘の報告書と杜正賢主編『杭州老虎洞窯址瓷器精選』を主な研究資料として分析を進める。杜正賢氏は，『杭州老虎洞窯址瓷器精選』の中で，老虎洞南宋時期の出土品が，北宋汝官窯の碗，器蓋，盞托，盒，套盒等同類の器物に相似しているという指摘をしている。本論文は，これらの研究を踏まえた上で，さらに南宋修内司官窯における汝官窯との類似点を，器形に注目して分析する。

〈樽式香炉〉

樽型の香炉は，宋官窯に典型的な器形の様式である。「青磁樽式三足香炉」【図３】は，汝官窯の伝世品には二つしかない樽式三足香炉のひとつである。この形は，漢代に流行した，温めた酒や羹を入れる温酒樽と呼ばれる青銅器を手本としながらも，作調は陶磁器の材質に合わせ，簡潔な象徴的造形をもつ。

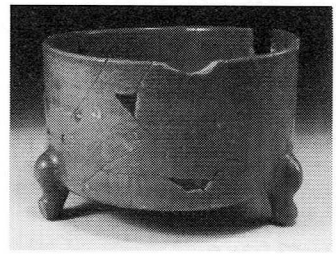

図16　青磁樽式香炉　南宋　高12.5cm
口径19.3cm　老虎洞窯出土

老虎洞窯址からも，樽式三足香炉が多数発掘された【図16】。大小の違いはあるが，その形は，汝官窯の「青磁三足樽式香炉」とほぼ同じである。

〈鵝頸瓶・長頸瓶〉

これは頸が長く胴部がゆるやかに膨らんで，高めの撥形高台を付けている形の瓶，いわゆる長頸瓶である。例えば汝官窯，河南省考古所所蔵の「天青釉刻花鵝頸瓶」【図17】があげられよう(注24)。老虎洞からは，長頸瓶が多数出土したが，大きなもので高さ35㎝，小さなものでも高さが22㎝はある【図18】。小さな長頸瓶は，薄胎厚釉で，灰色を帯びた粉青釉にわずかな貫入しかない。この造形は，汝官窯の造形と類似性を持っている。

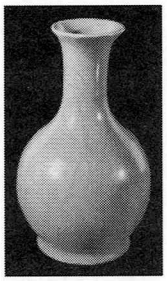

図17　天青釉刻花鵝頸瓶
汝窯　北宋　高19.6㎝
清涼寺汝窯出土

図18　青磁小鵝頸瓶　南宋
高さ22.2㎝　老虎洞窯出土

〈紙槌瓶〉

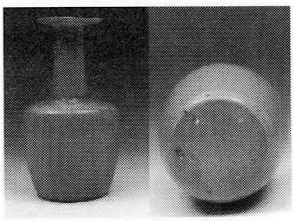

図19　青磁紙槌瓶　汝窯　北宋
高さ30.5㎝　清涼寺汝窯出土

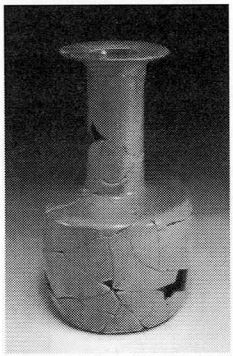

図20　青磁紙槌瓶　南宋
高さ20㎝　老虎洞窯出土

【図19】の汝窯の窖蔵出土品は，一品大形瓶の「紙槌瓶」とも呼ばれる(注25)。高さ30.5㎝で，汝窯の作品としては，極めて大きい瓶である。全体の輪郭は，直線で構成され，堂々とした力強い造形となっている。長い首に盤口が付き，逞しい折り肩をなしている。

盤口と肩とがほぼ水平に並び，それに対して胴体は，垂直に立つ。こうした造形が調和と意匠の統一感を与えている。高台はないが，底裏に５つの目跡が残されている。

老虎洞の窯址からは，「紙槌瓶」が，数多く出土している。【図20】これには見事な粉青釉に薄胎厚釉をなすという特色がある。瓶の口縁と肩の線が水平に伸び，首と胴体をつなぐ垂直の線を貫いている。造形的に安定と調和を感じさせる。汝窯の瓶より小さいが，形に類似性が見られる。

〈盞　托〉

宋代は，茶文化が盛んな時代で，茶器の需要が陶磁産業を促進したと考えられる。

盞托とは，一般に盞が茶碗のことを指し，托が茶碗をのせる皿のような上等な器を指す。宋代において上流社会で流行した形式の茶器と見られる。

例えばデイヴィッド財団所蔵の「天青釉盞托」をみてみよう【図21】。これは汝官窯の作例だと思われ，伝世品のなかでは，数少ない盞托のひとつである。花弁のような形の托盤に，撥形の高台がある。このような形の托盤には，高度な技術が必要とされる。

老虎洞窯址からは，同じく花弁の形をした托盤をもつ盞托が一点ある【図22】。粉青釉に，高い撥形の高台。老虎洞の出土品には，先の花弁形の托盤と違う円盤の盞托が多い。

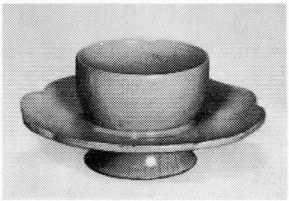

図21　天青釉盞托　汝窯　北宋
盤口径16.8cm　ディヴィッド財団

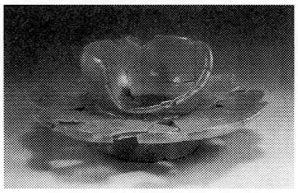

図22　青磁盞托　南宋　高さ6㎝
口径7.6cm　老虎洞窯出土

〈洗〉

文房用具に使われる器である。宋時代文人の好みをよくあらわしている意匠である。何と言っても，簡潔なのが特徴である。宋官窯の洗は，宮廷御用品の伝世品が多い。汝官窯洗の形は，高台がつくものと，高台のない二つのタイプがある。【図23】宝豊県清涼寺汝窯の出土品は，高台のない天青釉洗である。裏に小さな目跡がある。【図24】老虎洞にも同様な洗が発掘され，円い窯道具の痕跡が残されている。形は北京故宮博物院の伝世品とほぼ同じ造形である。粉青釉と円い洗の形だけで競演している美しさは，官窯らしい性格を伝えている。

図23　天青釉平底洗　汝窯　北宋　口径14.8cm
清涼寺汝窯出土

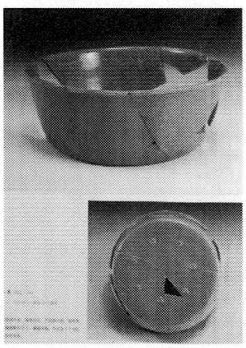

図24　青磁洗　南宋　口径14.5cm
老虎洞出土

以上，修内司官窯の技法と造形には，明らかに汝官窯との類似性がみられた。その技法及び意匠の継承は，技術者の流動性に由来するのではないかと考えられる。

宋代において官営手工業の規模は非常に大きかった。官営の工房では，民間から「官工」（官営工房で働く職人）を採用する，「招集民匠制度」と「民匠差雇制度」の制度ができた(注26)。これによって官窯では，生産状況に応じて民間から陶

工を採用することができた。また手工業業界の中で，特殊な優れた技術をもつ職人は，意匠と技術の専門指導・監督にあたり，これを通称「都匠」と呼んだ。また彼らは俗に「作頭」とも呼ばれ，分業作業の責任者であった。「官工」，特に「作頭」が高い賃金で雇われていると記されている(注27)。こうしたことからも，陶工が高い賃金で雇われる官窯への移動は，十分に考えられることであり，また，民間の陶工を招聘する場合の，彼らの技術が官窯にもたらした影響についても推察できよう。

そしてこれほどの類似性が，汝官窯と修内司官窯の両者に存在することについて，その原因として以下のことが考えられる。宋代の官営手工業の雇用制度にしたがい，南宋前期に北方から南方へ移動した汝官窯の陶工が，南宋修内司官窯へ移動したことにより，その技術が修内司官窯へ伝承されたのではないだろうか。

5．修内司官窯の独自の様式と特色

以上，南宋修内司官窯が，汝官窯から受け継いだ窯と技法や造形・意匠を分析した。しかし，さらに修内司官窯独自の特色は存在しないのかということを問うのも重要である。この問こそ南宋官窯の実態と性格を認識するために必要であろう。

修内司官窯では，汝官窯の影響を受け継ぎつつも，それ以後の技術の発展によって「粉青釉青磁」や「米色青磁」といった独自の様式が生み出された。さらに材料と技法の工夫によって，新たな「紫口鉄足」と「薄胎厚釉」もあらわれた。この修内司官窯青磁の様式と特色を以下で分析する。

〈粉青磁と米色青磁〉

老虎洞の出土品は，粉青色の青磁と米色青磁が主流である。筆者が杭州文物考古所の破片を修復する作業室で見たものには，粉青色の青磁が断然に多かったが，天青，灰青及び焼きすぎのため，濃い粉青色のものも沢山あった。青磁を焼く場合は，窯の温度により釉色の変化がある。修内司官窯の龍窯は，長く大きい単室窯であるため，同じ窯でも置く場所によって温度の差異がある。そのため統一した色にはなりにくいが，逆に青磁の釉色の微妙な変化を楽しむことができる。

老虎洞の出土品には，明るく澄んだ淡い青色の青磁釉と柔和な感じを与える白味をおび，透明さを失った粉青釉，つまり濁りのある粉青釉のタイプ，また細かな貫入に満ちた米黄色の青磁がある。更に1250度の高温で焼成したため，釉面に潤いと光沢がある。

これに対して，郊壇下官窯の場合は，比較的温度がやや低いため，釉面にこのような光沢が見られない。

米色青磁は，修内司官窯独自の色調である。出土品の米色青磁には，鵝頸瓶，觚形瓶，尊形瓶，套盒，碗，盤などがある。これらは一般の青い青磁の発色と異なっている。青磁は，高温釉の還元炎の焼き物であるにもかかわらず，米色青磁は，米黄色である。その理由は，粉青色の青磁釉を焼成している際に，窯の中で釉面と素地が酸化したことにより，これらが米色青磁になる。さらに温度が足りないせいで（龍窯は長いので，窯の温度は，後部が前部より低い）米色になり，青い青磁釉に焼成されない。これは一種の窯変であり，本来は完成品とみなされない。しかしこうした偶然性が，南宋人の感性に受け入れられ，その美が認められた。

また米色青磁の特徴は，貫入にある。器全体の釉層に細かい魚の鱗のようなひび割れが全面に生じている。これがまた米色青磁の見所とされるのである。

〈修内司官窯の特色〉

修内司官窯には，「紫口鉄足」，「薄胎厚釉」の特色がある。この特色の本質は，胎土と釉にある。修内司官窯は江南の杭州にあり，地理環境の違いにより汝官窯と同じ成分・材質の土を取ることができない。杭州の周辺の山では「紫金土」がとられていた。老虎洞発掘の際に深層で紫金土が出たと，発掘担当の杜正賢氏から聞いた。紫金土の混ぜた胎土は，鉄分の多い陶胎のため，胎の色は褐黒色或いは灰褐色を呈している。

一方，薄胎厚釉の特色は，陶工の轆轤の技術と施釉法によるものだと考えられる。薄胎といっても，器全体が同じ薄さでもない。実用性に応じて，轆轤技術の合理的なはたらきによって，器壁の厚さを部分的に調整して構成するものである。碗を例にあげると，碗の見込みのところから口縁に向ってだんだん薄くなっている。口縁は，器壁が薄いため，焼成する時に釉が流れて胎土の色が透き通るように見え，加えて高台の畳み付きの部分の胎があらわれて黒色になる。これが「紫口鉄足」とよばれる特色である。胎と釉が材質の調和となり，したがって官窯特質の素紋の青磁に微妙な発色の美を与えたのである。

さらに汝官窯の薄い釉層に対して，官窯の厚釉の本格的な登場は，南宋修内司官窯からだと考えられる。修内司官窯の胎の色は，汝官窯の香灰胎より濃いため，汝官窯の淡い天青釉にならない。そのため，工夫して薄胎にし，胎の色を隠すために釉を厚く二度，三度と施釉し，その結果「薄胎厚釉」という，独自の作風が完成

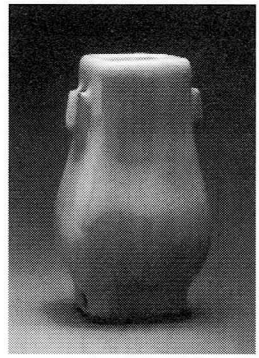

図25　青磁管耳瓶　修内司官窯　南宋　高さ8.4㎝　台北故宮博物院

図26　青磁琮形瓶　南宋官窯　高さ19.7㎝　東京国立博物館

されたと推測される。したがって，従来からあった玉を崇高の美とする中国の美意識が，玉のような柔和な質感の粉青釉と陶胎の質の一致に，卓越した美をみたのである。

玉にたとえられるべき南宋官窯の伝世品として，台北故宮博物院の「粉青管耳瓶」がある【図25】。玉器の玉琮を模倣したものには，東京博物館の「琮形瓶」もある【図26】。

南宋修内司官窯は，古玉器・古青銅器を模倣した祭器類の青磁を数多く焼造した。これは，南宋修内司官窯を代表する造形の性格である。修内司官窯は，儀礼用器に関して汝官窯からの様式を継承したにしても，汝官窯には見られなかった觚形瓶，尊形瓶，琮形瓶，鼎式香炉，供碗など多種多様な祭器形式が創られたのである。

従って，一見したところ老虎洞の出土品には，大形器が多いという特徴がある。実用品としての容器類の大形瓶もある。例をあげると高さ33.5cmの逞しい大形の梅瓶がある。更に口径27.3cmの大形の鉢と口径29.8cm大盤も数多く発掘された。また口縁部は折り曲がっている鐔縁，口径33.3cm大形洗も出土した。

それから実用品以外に，宮廷の室内に飾りつけのためと見られる形式の大形の鵝頸瓶（長頸瓶）もある。老虎洞の出土品には大形器がきわめて多い。この点に関しては，小形の器を主としている精美な様式で完成された汝官窯とは，対照的になっているのである。

青磁と玉の関係，器形の分析については，今後詳述する予定である。

6．終わりに

宋の歴史が北から南へ変化するとともに，宋朝の南渡に合わせて，陶磁をめぐる文化も変化した。北宋汝官窯から南宋修内司官窯へ，陶磁器の工芸技法及び造形が継承されたことは，北宋と南宋，二つの宋王朝の関係と同じく，一種の文化の継承を示しているであろう。そうした文化の引継ぎのなかで，たとえば人造の玉のような南宋官窯の粉青釉がどのように形成されていったかを見て，私たちは中国の感性と美意識が変化するさまを目の当たりにし，またその底で変わらずに求められる中国の理想の美をうかがうのである。修内司官窯が達成した理想の美しい青磁は，青磁の美の到達点とみなされていたと考えられる。

本論文は，杭州老虎洞の発掘品における窯の構造，工芸技法，造形形式，具体的には「裏足支焼」，「撥形高台」，「透かし彫り」，「弦紋」のような特色に見られた北宋汝官窯との共通点という，技術的側面から，更に類似した「三足香炉」，「鵝頸瓶」，「紙槌瓶」，「盞托」，「洗」のような造形・意匠の面からも，北宋汝官窯と南宋修内司官窯との影響関係を検討した。

以上の類似性に関する分析の結果，これらの類似性は，汝官窯の技術者の流動による技術の継承が一因ではないかという結論が導き出される。

そうした結論に加え，修内司官窯の汝官窯との違いにも注目したい。粉青磁や米色青磁の本

質を究めることによって，この地域独特な材質から生まれた特色が，実は高度な技術によって，修内司官窯で完成されていたことを明らかにした。汝官窯の影響を受けつつも，その上で独自の技術の発展によって「紫口鉄足」と「薄胎厚釉」のような優れた特色を生み出したことは驚嘆に値する。

器形には，汝官窯から継承された祭器形式の発展と見られる多くの古青銅器と古玉器の造形があらわれている。また驚くほどの多種の大形器も含まれている。

修内司官窯の発掘調査は，現在，進行中である。その調査によって，新たな発見がもたらされる可能性がある。調査結果の報告を待ちながら，さらに研究を深めていきたい。

注

（注１）南宋葉眞の『坦斎筆衡』は既に紛失。その文は陶宗儀（元，明時代）の『説郛』，「南村輟耕録」巻29に『坦斎筆衡』の「窯器」に引用　中華書店　1959年

「本朝以定州白瓷器有芒，不堪用，遂命汝州造青窯器，故河北唐，鄧，耀州悉有之，汝窯為魁。江南則處州龍泉県窯，質頗粗厚。政和間，京師自置窯焼造，名曰官窯。中興渡江。有邵成章提挙後苑，號邵局。襲故京（北宋の汴京）遺製，置窯于修内寺，造青器，名内窯。澄泥為範，極其精製。油色瑩徹，為世所珍。後郊壇下別立新窯，比舊窯大不侔矣。餘如烏泥窯，餘姚窯，續窯皆非官窯比，若謂舊越窯不復見矣。」と。

（注２）高濂『遵生八賤』巻十四「論官哥窯器」に，「……官窯品格，大率与哥窯相同。色取粉青為上，淡白次之，油灰色，色之下也。紋取氷裂，鱔血為上，梅花片墨紋次之，細碎紋，紋之下也。論制如商庚鼎，純素鼎，葱管空足冲耳乳炉，商貫耳弓壷，大獣面花紋周貫耳壷，漢耳環壷，文巳尊，祖丁尊，皆法古図式，進呈物也。……所謂官者，焼於修内司中，為官家造也。窯在杭之鳳凰山下。其土紫，故足色若鉄。時云：紫口鉄足。紫口，乃器口上仰釉水下流。比周身較浅，故口微露紫痕，此何足貴惟尚鉄足。以他処之土咸不及此。」と。

『景印文淵閣四庫全書』第871冊　子部177雑家類　710-711頁　台湾商務印書館発行

（注３）明曹昭『格古要論』格古要論巻下，「古窯器論・官窯」に「宋修内司焼者，土脉細潤，色帯粉紅，濃淡不一，有蟹爪紋，紫口鉄足，色好者与汝窯相類。有黒土者謂之烏泥窯，偽者皆龍泉焼者無紋路。」と。

『景印文淵閣四庫全書』第871冊　子部177雑家類　106頁　台湾商務印書館発行

（注４）荒井幸雄「南宋官窯開窯時期に関する一考察」『東洋陶磁』第１号　1973-74

長谷部楽爾編集『世界陶磁全集　12　宋』小学館　1977年

小山富士夫『陶磁大系36　青磁』平凡社　1978年

中国硅酸塩学会編『中国陶磁史』文物出版社　1982年

朱伯謙「論南宋官窯」『中国古陶磁研究』創刊号

李輝柄「宋代官窯瓷器之研究」『故宮博物院院刊』1992年第2期

李民挙「宋官窯論稿」『文物』1994年第8期

陸明華「両宋官窯有関問題研究」『上海博物館集刊』2000年第8期

（注5）杜正賢「杭州老虎洞南宋官窯址」『文物』2002年第10期

（注6）杜正賢主編『杭州老虎洞窯址瓷器精選』文物出版社　2002年10月

（注7）清朱琰『陶説』「古窯考」の記述，「呉越秘色窯，銭氏有国時，越州焼進。」中華書局（北京）1991

（注8）明末謝肇淛『文海披沙』で次のように記されている。「陶器，柴窯最古，世伝，柴世宗時焼造，所司請其色，御批云，雨過天青雲破処，這般顔色做将来。」北京図書館古籍珍本叢刊　65冊　北京書目文献出版社　1988

（注9）宋周密「乾淳起居注」，明陶宗儀編『説郛』（三）説郛巻42にある。『景印文淵閣四庫全書』第878冊　子部184　雑家類　315頁　台湾商務印書館発行

（注10）禚　振西「汝窯，柴窯与耀州窯的幾個問題」『考古与文物』1989年第6期

（注11）出川哲朗『東洋陶磁史 ── その研究の現在 ──』「耀州窯の位相」「古文献上ので有名な柴窯は五代の耀州窯製品である可能性がある。狭義の耀州窯である黄堡窯ではないししても，柴窯は広義の耀州窯に含まれるであろう。」東洋陶磁学会　2002年

（注12）長谷部楽爾『中国・美の名宝2』日本放送出版協会　1991年

（注13）愛宕松男『東洋史学論集』第1巻「中国陶瓷産業史」

「一は主体的条件ともいうべき瓷器焼成技術の進歩であり，二は瓷器を取り巻く客観的状勢，つまり中唐期に特異政治・社会現象の発生である。前者に関しては，殷代前期（紀元前十五世紀ごろ）に起源する原始灰釉器が，久しきにわたる停滞を強いられていた技術改善のを打開した結果，三国期に至ってようやく初歩の瓷器に到達することができてより以来，順調な向上を続けた末，中唐期には完成に近い段階に進んできたという事実を指摘すれば十分であろう。」三一書房　1987年

（注14）『古今図書集成・礼儀典』巻174「明堂祀典部」に，「自劉敞著『先秦古器記』，欧陽修著『集古録』，李公麟著『古器図』，呂大臨著『考古図』，乃親得三代之器，験其款識，可以為據，政和新成礼器制度皆出於此。」659頁，文星書店印行

（注15）周錚「宣和山尊考」『文物』1983年第11期

（注16）『中興礼書』巻9「郊祀祭器一」に「国有大礼，器用宜称，如郊壇須用陶器，宗廟之器，亦当用古世制度等。卿可訪求通暁礼器之人，令董其事。」と。『続修四庫全書』822　史部　政書類　37頁　上海古籍出版社

（注17）河南省文物考古研究所　「宝豊清涼寺汝窯址2000年発掘簡報」『文物』2001年第11期

（注18）葉兢民『汝窯聚珍』，北京出版社　2002年

（注19）出川哲朗「汝窯研究の現在」「汝州市張公巷からは汝窯とは違った更に質の高い青磁窯が発掘され，1999年と2000年に2回緊急の発掘調査が行われた。これが北宋官窯ではないかと推測されている。」民族芸術学会会報第61号　2003年7月

同じ論説の記述，「水仙盆」『国華』第千二百九十七號　平成15年11月

（注20）　正式な報告書はまだ公開されていないが，ホームページにこれに関する情報が掲載されている。（http//alacarteofchina.at.infoseek.co.jp/touji-20.htm）陶磁器ゼミ⑳「中国官窯の青瓷　官窯制度の起源と青瓷の系譜」の北宋官窯に関する河南考古「中外文物専門家五月聚汝州　張公巷汝窯之謎即将解秘」に掲載。

（注21）　秦大樹「杭州老虎洞窯址考古発現専家論証会紀要」『文物』2001年第８期

（注22）　杜正賢主編『杭州老虎洞窯址瓷器精選』，「老虎洞南宋層窯址清理出的素焼炉与宝豊清涼寺汝官窯窯址清理出的Ｙ14在外形，内部結構上都十分相似，平面均呈馬蹄形，由窯門，半圓形火膛，横長方形窯床，磚砌隔火墻，用磚分隔的出煙道以及出煙室組成，這説明老虎洞南宋層窯址的素焼炉脱胎於北宋末年汝官窯的饅頭窯。」文物出版社　2002年10月

（注23）　北京故宮博物院所蔵，唐代越窯水注。この水注は，1936年紹興古城に「唐戸部郎北海王府群夫人墓の中から出土した。高台を含む器全体に施釉されて，高台の畳付きの部分がきわめて粗い支え焼きの目跡が残されている。引用：李輝柄『中国瓷器鑑定基礎』101頁　故宮博物院編　紫禁城出版社　2001年

（注24）　葉兢民『汝窯聚珍』，「高さは19.6㎝。1987年，清涼寺汝窯窯址から出土した。」，北京出版社　2002年

（注25）　趙文軍　趙文斌『汝窯』「中国歴史名窯大系」93～94頁　文匯出版社　2002

（注26）　包偉民「宋代民匠差雇制度述略」『宋史研究集刊』，「民匠差雇制度」（この制度は唐代の「和雇制度」から由来した）とは，宋代の官営手工業と官府の工事等の労働力に関する制度である。宋代に官府の官工（官府の工房の職人）は，政府が戸籍の順番で町，特に農村部で実行していた賦役制度から労働力を招集した。これと別に，自分の意思で官府の官工（官府の職人）に応募することもできた。南宋では，上記の二つの形式から雇用された民間からの職人に政府から賃金と食料を支払われた。浙江古籍出版社　1986

（注27）　前掲書参照のこと。宋代には，民間から職人を雇用する際，職人の技術のレベルによって給料を与えるという記述もあった。宋代の手工業は，非常に発達しており，種類別に「作」として分けられていた。例として，それらの中には漆作，冥器作があった。それぞれの工芸作において，分業して作業が行われ，その各作業の技術と意匠の担当責任者は，優れた技術者・職人であった。これらが通称「都匠」，俗に「作頭」と呼ばれたのである。「作頭」の賃金が高いという記述もある。